一騎打ち

「土曜寸言」030301

NHK大河ドラマの主人公宮本武蔵は早熟の天才。十三歳で新当流の有馬喜兵衛を破ったのを皮切りに、佐々木小次郎を巌流島に破った二九歳まで、六十余回に及ぶ決闘を無敗で終えた。そのほとんどが「一騎打ち」である。

一騎打ちと言えば、上杉謙信と武田信玄の永禄四年（一五六一）の川中島の合戦がつとに有名だ。これは勝負のつかなかった例だが、通常は優勝劣敗、強い方が勝つのである。それに間違いはないが、実はすっきりしない一騎打ちもある。

ところで、「一騎打ち」というキーワードでインターネットのWWWを検索してみると、その殆どは選挙に関するページである。首長を選ぶ選挙戦などを決闘になぞらえて「一騎打ち」と呼んでいるのだが、すっきりしない一騎打ちというのはここにある。

一人区参院選、小選挙区の衆院選や首長選などは「一騎打ち」が多い。そしてこういう場合の有権者、特に無党派層の投票行動は減点法に傾きやすい。つまり、主義主張が鮮明で、日頃思ったことをずけずけ言ったり、行動したりするために敵の多いタイプの候補者には、当人が得意になっている割には辺りの評価は必ずしも高くは無い。ただし、こういうタイプの人には、少なからず熱烈な支持者が居る。この限りにおいて、この候補者は一見して強い人に見える。

他方、凡庸で目立たず、薬にはならないが、さりとて毒にもならず、「人柄」ぐらいが取り柄の候補者には、もとより熱烈な支持者などいない。そのかわり、不倶戴天の政敵などというものもいない。

こういう対照的な二人が一騎打ちを戦うと大概凡庸な方が勝つのである。つまり、この種の一騎打ちでは、強い方が勝つのではなく、勝った方が強かったとされるだけなのだ。

その点、定数の多い中選挙区制では、熱烈な支持者のいる候補者は、その得票数がいい塩梅に投票総数を「定数＋一」で割った数より一票多ければビリでも当選できる。

つまり、一騎打ちというのは、こと選挙に関しては必ずしも最強の人物を選ぶ方法ではないのだ。

いま、選挙の季節。統一地方選はすぐそこ。きな臭くなってきた衆院選など、今年は数多くの「選良」を選ぶことになりそうだ。凡庸を売り物にしている人物ではなく、耳に聞きづらく、口に苦いことを言う人をも、時には選ばなければいけない。柔らかい物ばかり食べていて、顎の退化した現代人のように社会の相が変わってしまいかねない。

武蔵の『五論書』を読みながらそんなことを思った。